

対象読者に配慮した説明内容の検討 —対象年齢の異なる百科事典の比較—

鈴木 陽香

先人から後世への知識の伝達によって文明の発展は進み、最初は口伝などによってなされていた知識の伝達は、文字とその羅列によって構成された文章が広まったことで大いに進歩した。しかし、同じテーマについて調べている読者であっても、一人一人の既有知識やニーズは異なるので、一通りの文章で全ての読者にとって適切な知識の伝達ができるわけではない。読者に対して何らかの知識を提供する文を説明文と定義すると、説明文にはそれぞれの読者の既有知識やニーズに対応するための配慮が求められる。書き手が読者に応じて様々な配慮をすることで、文章中の情報をより適切に読者に伝えることができる。先行研究では説明文の書き手に直接何に気を付けて書いたかを尋ねる研究や、対象年齢の異なる同じ分野の教科書を用いて文構造の違いや、用語の属性を調べる研究はなされているが、説明の内容面での配慮についての研究はまだ不十分である。本研究の目的はある事象について書かれている説明の内容面での配慮を明らかにすることである。これによって、説明文を書く際に書き手はより適切に読者に内容を伝えることができる。

本研究は、高学年向け百科事典とそれに付属している低学年向け百科事典を資料として、それぞれの説明文を外見、構成・成分、全体、性質、出来方、変わり方、機能、用途・用法、変遷、上位概念、下位概念、対比、等価の用語、反対語の14種類の説明の視点で分類した。また先行研究で中学生の教科書では具体的な用語が多く、より知識レベルの高い高校生向けの教科書では抽象的な用語が多いことが明らかになっているので「低学年向けの説明文では具体的な説明が多く、高学年向けの説明文では抽象的な説明が多い(仮説1)」を設定した。また、年齢が上がるにつれてより多くのことに興味を持つと考え、「高学年向けの説明文では低学年向けの説明文にない説明の視点が存在している(仮説2)」を設定した。以上の仮説に基づき、説明文の対象読者に応じてなされるべき説明内容への配慮を分析した。

結果として、具体的な説明も抽象的な説明も高学年向け百科事典にある場合の方が多かったが、具体的な説明に関してはカテゴリによっては低学年向け百科事典に多い場合も見られたため、仮説1は局所的には正しかったと言える。また、14種類の説明の視点のうち8種類の説明の視点は高学年向け百科事典の方が説明の視点が多かったので、仮説2は正しかったと言える。カテゴリ別に見ると「構成・成分」、「変わり方」、「機能」、「用途・用法」、「等価の用語」などは高学年向け百科事典で多く見られ、これらの説明は低学年向け百科事典の対象読者には複雑であるため、低学年向け百科事典では省かれていた。これらの説明をしなかったことが低学年向け百科事典での内容面での配慮であると考えられる。

(指導教員 中山伸一)